

トビイロウンカ

【学名: *Nilaparvata lugens* Stal】

1 トビイロウンカについて

トビイロウンカは体長 5 mm程度の褐色の小さなセミのような形をした虫です（図1）。発生の多い時期から、一般には「秋ウンカ」と呼ばれています。

この虫は、水稻の茎から養分を吸汁し、稲の生育を弱らせ、枯らしてしまいます。大発生すると、広い面積の稲を枯らし、坪枯れ被害を発生させる重要害虫です。

広島県では近年、平成10年、令和2年に大きな被害が発生しました。



図1 トビイロウンカ長翅メス成虫



図2 トビイロウンカ短翅メス成虫

この虫はベトナム北部、中国大陸を移動しながら増殖し、日本へは梅雨時期に下層ジェット気流に乗って日本に飛来することが知られています。

飛来後稲に定着したトビイロウンカは、水田で増殖しながら3世代繰り返し、大きな被害を発生させます。特に短翅型雌（図2）という増殖に適したタイプが発生すると、さらに被害は大きくなります。

2 被害の様子

トビイロウンカは、定着した稲株に卵を産み増殖していきます。ふ化した幼虫はあまり移動せずに、稲の茎から養分を吸うため最初の稲株を中心に枯れる被害、いわゆる坪枯れ（図3）が発生します。トビイロウンカの大発生時は坪枯れ同士が重なり、最終的にはほ場全体が枯死する場合があります。坪枯れとその周辺では、減収し、米の品質も著しく劣化します。



図3 複数の「坪枯れ」が発生したほ場とほ場全体が枯死した「反枯れ」

3 防除対策

トビイロウンカは海外より飛来するため、その飛来時期と規模を知ることが重要になります。これまでは予察灯（図4）での誘殺が一般的な調査方法でしたが、近年では下層ジェット気流を解析する飛来予測システム（図5）などが開発され、より早く正確な情報を得ることができるようになりました。

飛来時期から有効積算温度を計算することにより、その後の発生の予測し、防除時期を決定することができます。

防除時期は農薬の効きやすい幼虫発生盛期です。要防除水準は、「飛来後第2世代幼虫期に株当たり5頭以上。」です。



図4 予察灯

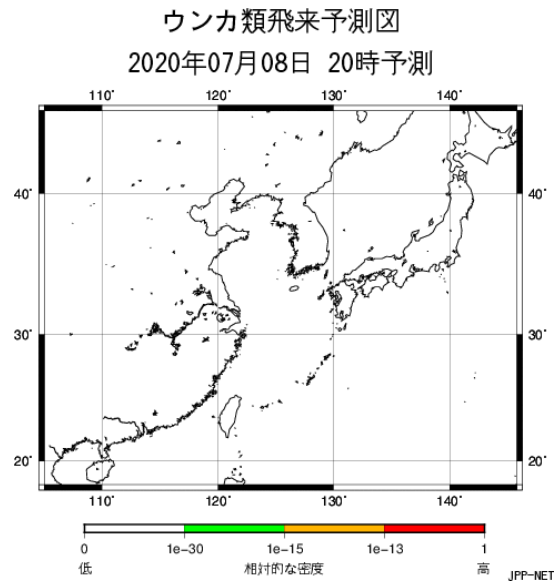


図5 ウンカ飛来予測システム(中央農業総合研究センター)

4 防除上の注意事項

- ・ウンカ類は風に乗って飛んでくるため、定着しやすい地形があり、毎回被害を受けやすいほ場というのは決まっています。そのようなほ場では特に発生に気を付けましょう。
- ・中生、晩生品種では、特に長期残効型の箱粒剤の使用を検討してください。
- ・トビイロウンカの卵や成虫に対する薬剤効果が低いため、幼虫発生盛期が防除適期となります。発生予察情報を確認し、適期に防除しましょう。
- ・トビイロウンカの幼虫は、株元に多く生息しています。粉剤や液剤により防除を行う場合は、薬剤が株元に十分届くよう散布しましょう。
- ・有機リン剤、カーバメイト系薬剤に加え、イミダクロプリド、チアメトキサム、クロアチアニジン、ブプロフェジンへの抵抗性発達の可能性があるため、防除薬剤の選定には注意してください。
- ・飼料用稲や飼料用米の防除を行う場合には、「稲発酵粗飼料生産・給与技術マニュアル（（一社）日本草地畜産種子協会作成）」、「飼料として使用する粳米への農薬使用について（農林水産省通知）」を参考にしてください。